オレ等、動乱！！(作者の気紛れ集とも言う)

二月満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレ等、動乱！！（作者の気紛れ集とも言う）

【Ｎコード】

Ｎ６３９２Ｄ

【作者名】

二月満

【あらすじ】

本編、「オレ、動乱！！」のサブ小説！あいつ等の心情とか、裏話とか、番外とか、作者の気紛れとか何でも有りだ！！本編に載せられねーのとかも載せる予定。本編ほどギャグじゃねぇぜ！！！主人公がサブキャラさ！

二つ名メーカー（前書き）

えーと、友達に二つ名メーカーとゆーのを教えて貰いました。
本編との関連性は０です

二つ名メーカー

二つ名メーカー。

名前を記入すると、ライトノベル風の二つ名を作ってくれる。

因みに作者（二月満）は、
「闇黒真紅（クリムゾンインパクト）」でした。

名字と名前の間にスペースを入れると変わりますが……。

今回は、そんな二つ名メーカーでつけた、【オレ、動乱！！】の皆の二つ名（スペース無し、半角スペース、全角スペース）をのっけてみようという企画な訳です。

まずは、不幸体質？な、主人公、
「仙台勇二」から。

仙台勇二さんの二つ名は・・・
「電磁音階（ブラッディテロル）」です

仙台　勇二さんの二つ名は・・・
「堕落亡霊（ホーンテッドメビウス）」です

仙台　勇二さんの二つ名は・・・
「暴風研究（リボルバーパラノイア）」です

……だ、そうです。これだけ見るとかなりの性格破綻者みたいです

な……。

「暴風研究」て……。自分が暴風雨みたいな奴ですよ、勇二君は。

続いて、勇二の何かいやーな弟、

「仙台智裕」。名字が同じだから勇二と大概と同じだろうとおもったら大間違いでした…。

仙台智裕さんの二つ名は・・・

「薄闇（ゴーストブルー）」です

仙台　智裕さんの二つ名は・・・

「切断（テスタメント）」です

仙台　智裕さんの二つ名は・・・

「詩的賢者（ブルージーバルス）」です

何ですかね！この無駄にカッコいいカンジは！！まあ作者の偏見とか裏設定とか色々総合して智裕は結局良いキャラなんで許してやりますが…。

しかし「詩的賢者」とか良いですね、物凄く智裕のイメージに合ってます。勿論「切断」も。

「薄闇」作者の本名でやったのと同じなんですけど…

ここからは噂の四人衆ですよ。本編に出てきた順にいきましょうか。
…あ、でもそれだったら山下と純也どっちが先が分んないですな…
…。

……あれ？

此所に来て純也に名字が無い事が発覚！！（↑今気付いた）

純也は……もう名字いらないですね！！

という訳で、「純也」。

純也さんの二つ名は・・・「禁断縛鎖（バインドカタルシス）」です

以上。彼は扱いやすくていいキャラですが、いかんせん存在感が薄いんですよね……。一番濃いのは桃時か……？

続いて、我等がアイドル？「山下尋貴」。キャラを全く考えずに話を進めた結果の犬という不幸な見た目不良はいったいどんな源氏名（？）を……？

山下尋貴さんの二つ名は・・・「嗜眠風景（サイレントブルー）」です

山下　尋貴さんの二つ名は・・・「空白零度（アブソリュートプレジャー）」です

山下　尋貴さんの二つ名は・・・「終末撃発（メビウスゲーム）」です

カッコいい物の中に一つの爆弾。ええ、山下尋貴ですとも！明日もまた見てくれるかな？いいともおおお！！

次は、敬語眼鏡な「木野誠」。この人はなかなかヤバい爆弾を持ってるんですが……まぁ、それは本編には出てこないでしょうね……。

木野誠さんの二つ名は・・・「死と微塵（プラズマカルマ）」です

木野　誠さんの二つ名は・・・「強襲拡散（グレネイドクライシス）」です

木野　誠さんの二つ名は・・・「歪曲奇譚（エレメンタルディストーション）」です

……全部何か狂ってるみたいなんすけど。あの眼鏡の下の笑みに隠された真実とは……？

そして最後。関西弁が何かエセっぽい「桃時蓮斗」ですな。作者関西生まれ関西育ちなのに違和感があるっていうのはいかがなものか……。

桃時蓮斗さんの二つ名は・・・「狂音警報（サタニックデイジー）」です

桃時　蓮斗さんの二つ名は・・・「血塗られた回路（クリムゾンジャンキー）」です

桃時　蓮斗さんの二つ名は・・・「絶滅（グロテスク）」です

……。

あまり深くは追及しないでやって下さい。「コイツヤバいんじゃねーの」とか言うの止めてあげて下さい。

……と、いう訳で、皆の二つ名が完成！そこから、こんな名前のライトノベル作家が書きそうな小説を考えてみました。……余り深く考えずにご覧下さい。

「」タイトル、【】内容です。

仙台勇二←

「俺は此所にいる」【誰もいない岬の灯台小屋に住む非科学的な物を一切信じない青年「べーこん・レタス」は、風の研究をしている。ある日、いつものように外に出て、風の研究をしていると、急に灯台に雷が落ちて、いきなりでてきた悪魔に体を乗っとられてしまった！！夜の間だけは自分の体に戻れるのだが……？】

実際勇二が書いたら

「俺は何処にいる？」【朝起きたら顔が魚になっていた「べーこん・レタス」が、今の現在地をケータイのＧＰＳ機能で探す！！】

……何かすいません。ごめんなさい。それでも私はやりました。

続いて、仙台智裕←

「血の花」【人との対話能力が欠如している「べーコン・レタス博士」は、どうしても人を器としてしか愛することができない。そんな彼に恋した娘が、自分の愛を受け入れて貰おうと自殺してしまう。それを見たべーコン・レタス博士は……？】

本物・仙台智裕もこんなの書きそうですね。博士は最後死にそうですね。それまではずっと精神世界みたいな。敢えて違うの書くとしたら「俺と兄貴」ですかね。はい、さーせんっした！

えー、純也は……あんま思い付くような名前じゃないっすね……←

「ＧＯＤ　ＷＥＰＯＮ」【２ＸＸＸ年、人類は相次ぐ天変地異で数千人にまで減少していた。それ等は全て、海底都市「８０１」に集められ、その異常気性の真実は、宇宙からの侵略者によるものと知らされる。そこから３０年。人類は、更に減少の一途を辿り、体に武器を仕込むことで、心と体を安定させていた。そんなある日、見回りに出ていた一等兵が、死体になって帰ってきて……？】

実際純也

「俺と幼馴染み」【俺と幼馴染みのはちゃめちゃラブコメ！】

……最近純也が可愛くなってきた。純Ｙ↑意味のない自重

えー…次は山下尋貴←

「砂に羽を散す」【プロサーファーの「ベーコン・レタス」は、練習中の怪我が原因で、下半身不随になってしまった。自棄になって酒に溺れる彼の元にとどいたのは、一人の男の子……って、この子、羽とか角とか生えてるんですけど！！そんなこんなの内に、悪魔同士の戦争に巻き込まれて！？それぞれの哀しい過去が交差する……】

実際山下←

「俺とご主人様」【犬が、ひたすらご主人様に尽くす話】

尽くすだけで幸せになれるって……。損な役回りだ。山下君についての言い訳はしないことにすると努力しよう。うん、努力だけ。努力って世の中で一番苦手だけど。

木野誠さん。家で和服きてそう。

「その旋律も君の耳には届かない」【廃墟の中にぽつりと佇むバー「ベーコン・レタス」。そこに集まるのは、行き場を無くした者達、「８０１」。怪盗を働く彼等に舞い込んだ、不思議な依頼。それは、死んだ娘の部屋から、ピアノを盗みだしてくれ、というもので……？】

実際木野

「僕と貴方」【静かながら、押さえきれない想いを綴った、渾身のエッセー】

ライトノベラー木野は題名が全部長そうです。あとやたらシリーズものっぽいですな。

さー来ました、桃時蓮斗←

「監禁世界」【長い間、想い続けてきたあいつが、夜、忍び込んで

みよう、なんて誘うから。俺達は逃げ出せなくなってしまったんだ……。深夜の神社にやってきた俺達は、社の中に閉じ込められてしまった。中は、外から見た姿と不釣り合いに広い。真暗闇に残された、俺と、あいつ。狂気は、すぐ側にある。】

実際桃時

「監禁」【長い間、想い続けてきたあいつを、閉じ込めた。狂気の観察日記。】

桃時君はこーいう奴です。皆様、注意して下さい。

…取り敢えず、今回はこれで終り！

イメージブッ壊れたわ！っていう人もいそうですが……始めからイメージなんてありませんですよ！！（何の主張

誰か

「こんな名前のライトノベル作家が書きそうな小説」、実際に書いてくれませんかねぇ……私は今スランp気味だから無理です（黙れ

取り敢えず、今回はこのへんでどろん。

二つ名メーカー（後書き）

さーせんっした

貴方が主人に成り得たのは。（前書き）

山下君はなぜどーして勇二を好きになったのか？

そーゆー感じの話です。

微下ネタ？注意。

閲覧は自己責任にて宜しくお願いします。

裏話は全員分書こうと思ってます。まだそーゆー感じじゃない人の裏話が先に出来上がっていたりもしますが……。

貴方が主人に成り得たのは。

中学時代はテキトーに乗り過ごした。

彼女なんていらなかった。まぁ、セフレは何人かいたが。

恋？

そんなもの、いらない。

女はいちいち纏りついてくんのがうっとうしかったが、テキトーに相手して、面倒くなったらダチにやったりした。

「格好良い。」

「明るいけどちょっと冷めてる。」

「遊び慣れてる。」

「不良だけどそれが似合ってる。」

誰も俺の本当の顔をしらない。

教えるつもりもないが。

それは、高校に入っても同じだろう。

そう、思っていた。

私立泉院学園。

地元でも有名なバカ高校だ。試験に名前書くだけで入れるとか言われている。

そして、今日から俺が通う学校でもある。正直かったるい。中学からのダチの桃時とか木野がいなかったら、入る気すら起きなかっただろう。

桜がそこらへんを飛び交い、頬をかする。

見た事のない奴等と並んで、体育館に向かう。……入学式があるのだ。

外見ほど古びていない館内は、春特有のひんやりとした空気で満ちていた。

気持ち悪ィ。

何も思ってはいないのに、そう口の中で呟いて、自分のパイプイスにどかっ、と腰を下ろした。

「ゆーうじ！！」

騒々しい叫び声が聞こえた。バタバタという煩い足音と共に、体育館に入ってくる。

「純也！！　お前うっせえよ！！　場所考えろ、場所を！！」

なんだよ、答えてるお前の方が煩ぇよ。誰だ？後でボコってやろうか。

俺は声の方へ振り向いた。

……！！

「……？　山下君？　どうしたの？」

「……何でも、ない。」

心配したのか、ただ気に入られたいのか、同じクラスの女子に声を掛けられた。が、いつものように軽く話題に入れない。

引きつけられた。

目が、放せない。

「そう？　じゃ、メアド交換しようよぉ。あ、あたし木田怜子ぉ。れいちゃんって呼んでぇ。よろしくね！！」

言葉が、耳に入らない。

何故？

分からない。

「もう！　山下君！？」

「あ、悪ィ悪ィ。メアドな。」

なんで会ったばっかなのに、名前知ってんだとか、この学校ケータイ禁止なのに堂々と出していいのかとか、そんな疑問は一切吹き飛んでいた。

「俺等ももう高校生だぜ、勇二？」

「やべーよ。俺勉強智裕に教えてもらねぇといけなくなったかな。」

「智裕君弟じゃん！！」

後ろの二人の会話を、必死に聞いてしまう。

「はぃ、赤外線完了！　今からメールでアドレス送るね！」

「あ、ああ。」

そっちも赤外線で送ったら良いんじゃねーのとか、俺にメール送り

たいだけなんじゃねーのとか、考える暇すらない。

「つーか純也お前高校こそはちゃんと宿題やってこいよ！」

「えぇ～？　やだぁ、じゅんちゃん宿題きらーい。」

「キモッ！！」

「うわ、ひでぇ！！」

隣りで木田が「れいちゃんの着メロくぅちゃんにしてー！」とか言っても、は？　何がれいちゃんだよ、お前なんかキダタローで十分なんだよ。とか、お前の着メロダースベーダーで決定ー。とか思う余裕はない。

「つーか見ろよ、純也。あの金パ、西中の山下じゃね？」

びくん、と体が震えた。

耳元で囁かれているかのように、鮮明に聞こえる声。

名前を呼ばれた一瞬のうちに広がる期待のような疑問のような感情。

今までの会話で分かったのは、名前と、クラスと、二人の出身中学。

二人はどうやら同中卒らしい。

羨ましい、と思う。

ずるい、と思う。

何故？

やはり、分からない。

しかし、その感情はどうやら「勇二」という片割れを中心にして回っているようだった。

勇二？　俺にははたしてあの人を呼び捨てにする権利があるのだろうか。勇二君、勇二、さん。勇二…様、勇二様か。そっちの方がしっくりくる。

……バカじゃねぇか。なんで同級生に様付なんだよ。

「マジだ。目立つなー。」

「つーか顔キレー過ぎだよなー。女の気持ちも分かるわ。」

「うわー勇二にそんなこと言わせるなんて、嫉妬ー。」

「お前、相変わらずキモいな。」

「ちょっ！　今のは酷いだろ！！」

どくん、どくん。

やけに鼓動が速くなってくる。

どくん、どくん。

顔、キレー過ぎだよなー。

ぐるぐる頭の中で言葉が回る。今まで何人もの人に言われてきたはずなのに。

今までで、一番、むず痒い。

もっと褒めて欲しい。

でも、傷付けて欲しい。痕を残して欲しい。

「メールこないねー。」

「え？　あ、ああ。もう赤外線で良くね？」

「えー。あ、やっと来たぁ。もう、遅いよぉ。」

れい、と登録した。否、正しくはさせられた。倖田來未は持ってないと言うと、赤外線で送られて、それを登録するハメになった。

「つーか担任あのハゲだよねー。」

「ハゲ言ってやるなよ、カワイソーだろ。」

「尋君思ってないくせにー。」

いつ、尋君って呼んでいいって言った？　正直ブリっ子はウザい。
それにイタい。

「つーか俺等４年連続同じクラスとか、もう運命じゃね？」

「は？　お前と運命とか、キモ過ぎ。ありえねー。」

同じクラスが良かったな。

パイプイス群を大きく迂回しながら前の方に進んでいく二人を目で追う。

彼等が座ったのは、俺から大分はなれた席だった。

いろんな女から誘われた。

カラオケとか、昼飯とか。奢るとまで言う。

だが、俺は行く気にならなかった。

何の予定もないまま家に帰る。

歩きながらも、電車に載っている間も、頭にはずっと、勇二様のお顔が、焼き付いてはなれない。

あれ？

勇二様？

お顔？

俺はどうしてしまったんだろう。

がちゃり、と家の鍵を開ける。古いアパートに一人暮らし。まるで不良の鏡だ。

不良。

勇二様は、不良がお嫌いではないだろうか。

金髪はお嫌いだろうか。

色、染め直そうかな。勇二様と同じ、黒に。

「山下。」

まだ、勇二様には名字でしか呼ばれた事が無い。それも、俺に声をおかけになられたのではない。

「……って、何考えてんだ、俺。」

やべーよ。

俺、頭おかしいんだわ。

「……ねよ。」

飯も食わずに、ベットに転がった。

ケータイから流れる倖田來未が、だんだんと遠のいていった。

……

…

……ヒロ。

……ヒロ、返事しろ。ご主人様だぞ。

「は、はい。俺はここです。」

……一回でちゃんと返事しろ。

「はい、すみません。」

……お仕置だ。

「はい、ご主人様。」

ビシッ

「あっ…！！」

……なんだ、嬉しいのか？

「ご主人さまぁ。」

……何だ？

「わ、分かってらっしゃるのに……。」

……分からない。お前がちゃんと口で言え。

「……も、もっと、叩いて、下さい…。」

……フッ、とんだ変態だな。どれ位叩けばいいんだ？

「痣が、残る、くらいに。」

……どこを？

「……。」

……尻か。自分から突き上げるなんて、お前の友達が見たら、なんて思うだろうな。

「……言わ、ないで、下さい…。」

……恥ずかしいのか？　自分からしておいて。

「恥ずかしい、です。」

……クスクス…、さて、何で叩いて欲しい？

「ご主人様の、持ってらっしゃる、その、鞭で。」

……そうか。

パシッ

パンッ

ピシッ

「はぁ、ひぁっ、はぁあんっ。」

……気持ちイイか？

「はっ、はいっ！　ご主人、様！」

……俺の名前は、

……勇二。

「勇二、様。」

ジリリリリリリリ！

……時間切れだ。じゃーな。

「ま、待って下さい！　ご主人様！！」

リリリリリリリリリリリリバンッ！！

リィーーーン……

「マジかよ……勃ってんじゃん。」

何でだ？

そして何だったんだ。

さっきのは……夢？

叩かれる夢見て興奮するなんて……俺ってM？

しかも……

相手、アイツだった。

「何なんだよ……クソッ！！」

枕を投げ飛ばす。壁にぶつかった枕は、だらしなく床に落ちた。

ムシャクシャは収まらない。しかし、俺にはどうする事もできない。

しかも、さっきから自分の尻がざわざわしている感じがする。

「……。」

この際、男とかそういうのは置いといて、Mかどうか位確かめてみようか。

俺は普段なら絶対にしないような事を、はじめてしまった。もう、本当に頭がおかしくなってしまったのかもしれない。

ゆっくりとスウェットごと下着をずらす。顔はベットにつけ、尻を突き上げるようにして膝を折る。

近くにあったプラスチック製のハンガーを手に取った。

パシンッ

「いっ！！」

痛い。

だが、一瞬だけ、ご主人様のお顔が浮かんだ。

……ご主人様？

「はぁ…。」

ため息を吐き出す。認めたくはない。無いが、しかし……。

俺は学校に向かっている。

朝色々あったから、一限には確実に遅れるだろうが、この際仕方がない。

只今の時刻、８時４５分。一限は５０分から。

電車から降りる。学園までは徒歩１０分。

走れば半分だ。

走れば間に合うかもしれない。だが、俺は走る気にはなれなかった。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！　遅刻遅刻遅刻遅刻遅刻ううううううううう！！！！」

いきなりの叫び声に、後ろを振り返った。

「ご主人様……。」

だんだん近付いてくる。

どくん、どくん。

鼓動が、激しくなってきた。

「ん？　あ、山下じゃん！　お前も遅刻するぞ！！　ここの生活指導の中西、うるせーらしいから走った方がいいぞ！！！」

「あ？　どっちみちもう遅刻だよ。」

「んなこたねぇ！！　俺はやってみせる！！！」

「そーか。なら、ここで喋ってない方が良いんじゃないか？」

「ああああああああああ！！！！　そうだった！！　じゃ、俺は行く

ぜ！！！　じゃーな！」

俺は、初めてご主人様とお話をすることができた。

小さくなっていく背中を眺める。もっと一緒にいたかったが、股関の方が大変なことになりそうだったから諦めた。

「気持ちイイ……。」

背中がぞくぞくとして、俺は制服の上から、自分が叩いた尻を撫ぜた。

俺は学校までの道を、また歩きだした。

きっと、着いたらご主人様と二人で生活指導室だ。

ニタニタする顔を、俺は元には戻せなかった。

ご主人様がお気付きになられるまで、この気持ちはそっと胸にしまっておこう。

いや、もう一生打ち明けられないかもしれない。

それでもいい。

それでも、勇二様は、俺のご主人様だから。

きゅう、

顔を思い出して、胸が苦しくなる。

桜が、どこまでも色素の薄い青空に舞っている。

それでも、

いつか、

いつか。

貴方が主人に成り得たのは。（後書き）

……相変わらずさーせんっした。

白い日後の苦悩！<前>（前書き）

ちょっと長くなりそうなので、前、後編に分けます、すません。

白い日後の苦悩！＜前＞

バレンタインデーは、そりゃそりゃ悲惨だった。

何が楽しゅうてあの集団の中で聖なる日を迎えなければならなかったのか。俺は問いたい。全人類に問いたい。そりゃもう１日中でも問いただしてやるさ。間違っているのは並に生れた俺なのか！？……と。

いや、そういうのはまだいいんだ。奴等、顔だけはすげーから。ま、純也は俺と同じ位だが……あれ？俺今年０（智裕が投げてよこした大量のちょこれいとー共はカウントしない）だったのに、アイツ１こもらってなかったか…？…しかも、背ぇちっちゃくて可愛らしい子に……。そ、そうだ。そうだった。俺ってば、嫉妬の余り付せんびっちり純也の鞄に張り付けたんだった。

……問題は、そこからだ。

苦痛の聖・バレンタインも終盤の放課後。いつも通り、４人にほぼ連行されるようにして帰路についた訳だが。

「ハニー！」

にっこり笑った桃時に、口元に強烈な匂いのする布を押し当てられた。

「……も、桃時…お前もか……！！」

俺はブルータスって色黒かな…とか思いながら気絶した。

……おかしい。体がヌメヌメっと、ヌルヌルっとする。おまけになんだかほの温かい。俺はうっすらと目を開けた。

「おや、ダーリン。目が醒めましたか？」

一瞬誰だか分からなかった。

「…あ、木野か。眼鏡無かったから分からんかった。」

「眼鏡は邪魔でしたのでね。……貴方を舐めるのに。」

……は！？

と、言い返す間もなく、頬をぬるりと舐められた。何故！？何故俺べろんべろんされちゃってんの！！？

取り敢えず木野を引剥がそうとするが、手が動かない。縛られているらしい。……ヤバくないか？

そういえば腹の所とかすーすーして寒い。何故だろうと顔を下に向ける。

「……な、なにしとるですかお前等！！」

そこには、あー言いたくない言いたくない言いたくない！取り敢えず身の毛もよだつゆうな状況、とでも言っておこう。

「なにって。」

「俺とじゅんやんがハニーの乳首にチョコ塗ってベロベロ舐めてるだけやんかー。」

詳しく説明すんなあああああああああああああああああああ！！身の毛がよだっちゃうだろーが！！

「つーか桃時、じゅんやんってなんだよ……毎回呼ぶ度にあだ名かえんのやめて欲しいんだけど。」

「ええやん。かわええやん、じゅんやん。」

「いや、だからそーゆう問題じゃなくてな…。」

そんなどーでもいい話しながらも俺にハケでちょこれいとーみたいな茶色い液体……ぜってぇちょこれいとーではない！世の男性の夢と希望はこんな物じゃない！！…取り敢えずそれを塗るのはやめて欲しい。

本気でやめて欲しい。木野は俺の唇にちゅるちゅるするのをやめて欲しい。

まあ、ズボンを脱がされなかったのが唯一の救いか。いや、感謝し

ろみたいな目で見るのやめろ。俺の事思って…みたいになっているが、本当に俺の事思ってんなら今すぐこの行為をやめて頂きたい。すげーイライラする、そして木野の隙間から下の状況を見てしまった。……死にたくなってきた。いや、死ぬのは無理、消えて無くなりたい。

「……や、山下君は何をやっているのかね…？」

俺の両足は、目の前に座り込んでいる山下に、何故か茶色い五本指ハイソックスをはかされていた。……ちげぇ。世の男性の夢と希望だ。

「大丈夫ですよ、ご主人様。俺、一度舐めて綺麗にしましたから。」

綺麗にしてからなら人の足を夢だらけにしていいのか。……夢だらけってなんだ。もういい。こんなの夢じゃねぇ。只のちょこれいとー、です！

「……それで？これからどーするつもりなんだ？」

木野が耳に生暖かい物を塗ってる気がするが全力でスルーする。桃時と純也もなんだかそんな風だが全力でスルーする。

「もう一度、舐めて綺麗にして差し上げます。」

山下は頬を赤く染めながら、真直ぐな目でこっちを見てきた。すまん。男の上目遣いには全く萌えん。

山下は言い終るか終らないかで、俺の右足の親指を咥え込んできた。

「ちょ、冗談はよし子さん！！やめなさい、全力でやめなさい！！」

俺が叫ぶと、山下はやけにあっさりと口を足から放した。

「………ご主人様…誠や蓮斗やじゅんやんは良くて、俺はダメなんですか…？」

「いや、だからなんで山下までじゅんやん！？」

「もうお前等全員やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

………まあ、そーゆう事があったわけだ。もう一秒たりとも思い出したくないぜ…。

……あれから何があったかなんて聞かないでくれ。取り敢えず、多分皆さんの御想像の通りだ。もうダメだ。終り的な意味でダメだ。

「……で？　俺にそんな気憶は無い。あったかも知れんが無い。無いったら無い！！」

舞台は勝ち組男子だけの祭日、白い日も過去ったある日の放課後イン夕暮れの教室。いや、俺帰りたいんだが。

「酷い、ひでぇよ、勇二！　俺達一人一人からじゃ迷惑だって思ったから妥協して勇二にプレゼントしたのに！」

ひでぇのはどっちだ！！！

「お前等あああああああああ！　あれの何がプレゼントですかああああああああああ！！　ふざけてるなら死んでくださいいいいい！！」

さようなら！！　今までどうもありがとうございました！

「そ・れ・に！！　ありゃ完全にお前等が楽しんでただけじゃねーか！！　しかも最後に一人づつディープキ、キ、キ、キ……スさせやがって！！」

因みに山下はやらなかった。まあ奴の良識からではなく、顔が近付いた時点で何故か鼻血噴いてブッ倒れたのだが。何がしたかったんだか。

「ハニーも気持ち良さそうだったやんか。」

「お前がしなかったら帰さんって言ったんだろおおおおおおおおおおお！！！」

桃時テメェ、一番長くやりやがって！！　窒息死するかと思ったわ

！！！

…しかし桃時さん、テクニシャンでした！　……もう嫌だ。何てこった、男のキスの上手さを体験して比べる日が来ようとは。

「あー…取り敢えず場所変えませんか？　もうすぐ門が閉まってしまいます。」

「え！？　嘘、もうそんな時間！？　ゴメン、俺用事あるから帰らなきゃ！」

マジか。よっしゃ！　一人減ったぜ！

「あー、残念。俺もや。」

なんと！！　お前もか！

「僕は無いんで、ダーリンと尋貴と3人で帰りましょうか。」

何でもいいから早く帰らせろ。俺見たいテレビあんだよ。

校門で桃時と純也と別れた。…あれ？　俺帰りたいんですが。帰るには純也と同じ電車に乗らなければならないのですが。

「じゃ、いきましょうか、ダーリン。」

「まいりましょう、ご主人様。」

……敬語に囲まれてみた。

つーか、俺の意見とか人権とかは無視なのか。酷いぞ！　お前等それでも人間か！

「いや、俺も帰りたいんだが。」

「…どこに行きましょうか…？　ダーリン、何処か行きたい場所ありませんか？」

「ご主人様…鞄、俺がお持ちします…。」

はーい、無視ですか。無視ですか！　傷ついたぞ、俺様とーっても傷ついた！

「もう知らん！」

俺はクルッと振り返りその場から脱兎のごとく勢いでガシッ

「行く場所無いんで、折角ですからここからは一番近い尋貴のアパートに行きましょうか。」

「放しなさい木野コノヤロー！」

「えっ！　か、片付いてないから無理だって！」

山下は顔を赤くして俯き、でも、とかうう、とか意味が分からん言語を発している。つーか俺は無視か。またか。

「男入れるのに片付いてるも何も関係ないでしょう…。女ですか、貴方は。」

「うう。」

山下は俺と木野を交互にちらちら見て、折れた。

「仕方ない…。」

俺達は、山下の部屋に行くことになった。…いや、俺マジ帰りたいんだけど。母さんキレるって。

ドン。

「うぎゃ！？」

山下の家に行くのに駅を出て歩いていると、顔面になんか当った。つーか当てられた。つーかマジに殴られたような。

俺はぶつかった（希望）奴に非難の目を向ける。

「……あ？　なんか文句でもあんのか。」

「……ナイデスゴメナサイ。」

怖い人達キタアアアアアアアアア！！！

これじゃこっちは迂闊に手を出せねぇ。つーか出したらヤバい。ヤられちゃうよ。いや、殺されるの方の意味で。

「ん？　その端っこの、金描の山下か？」

金描！？　菌病じゃなくてか？　なんだその変な通り名は。まるで不良だ。

「…ああ？　黙れ。ご主人様に話しかけんな。触んな。」

気付いた時には、山下は既に俺ぶん殴った奴（現実）の胸倉を掴み、般若の如く形相で、……うん。まあ、うん。そうだ、忘れてた。コイツ元不良だった。

「しかもお顔に……！　……殺ス。」

あのー、俺帰っていいですか？

その三十分後。つまり今。取り敢えず俺は困っていた。

腰に抱き付いて甘えた声を出す山下とか肩にもたれて耳元に囁いてくる木野とかまあ普段の悩みはそんな感じじゃないか。……しかし

だな、今回はちょっとばかり特殊だ。

「……。」

……この、並々と詰まれた不良さん達を、俺はどうすれば良いのだろう？

全くもって予想ＧＡＹだが、山下は強かった。普通なら「ぎゃははは何だよご主人様って！」位、相手が言える余裕があって当然だ。しかしだな。

「瞬殺……。」

なんか俺、すげー奴に関わっちまったんじゃねぇだろうか。

「まあ、ひとまず片付きましたし、尋貴の家に向かいましょうか？」

流したー！！　ママァ、怖いよこの人達、むしろ日常茶飯事的な空気がムンムンとしてくる！！！

「にしても、貴方方は付いてますね。蓮斗がいなくて。……じゃあ、出発しましょうか。」

桃時何者おおお！！？

…俺は深く追及しないことにした。だって危険なにおいがするんだもん！

……え？　だもんとかキモい？　……すまそん。

白い日後の苦悩！＜後＞（前書き）

いやー、遅くなりました。の割に訳分かんない内容ですすいませぬ。

今回木野君美味しいトコ取りの様な気がする。

山下君がやたらと出て来るのは作者の趣味なのだろうか……？

白い日後の苦悩！＜後＞

俺は、何故か横抱きにされた状態で山下宅に到着した。

木野はすぐ奥に入っていって、「楽しみにしててくださいね、ダーリン！」だかなんだか言っていた。一体何を楽しみにしろと？もう俺の目の前真っ暗です。

つーか横抱きって……。敢えて言い方を変えてみたが、普通にお姫様抱っこです。かなり恥ずかしい。死にたい。

道行く人に物凄く見られたんだが。ガンと付く感じで見られたんだが。死にたい。

放せと喚いたら無視された。理由は何故におじゃるかと聞いたら「ご主人様先程お顔にお怪我を……。」とぶるぶるされた。足カンケーねぇよと叫んだら「関係あります！」と更にぶるぶるされた。落ちたら痛そうだったから大人しくなってみた。……取り敢えず死にたい。

「汚い部屋ですが……。」

玄関に座らされてローファーを脱がされる。学校指定の奴。私立だし。馬鹿だからここしか入れなかったし。泣きたい。この際山下が脱がすついでにと何故かマッサージしてくるのとかスルーする。出来ない。泣きたい。

「取り敢えずやめろ山下。このままだと俺、泣いたり死んだりしち

ゃう。」

「そんな！」

山下はビクリと肩を震わせばっと俺の足から手を放した。

なんだか部屋の奥から良い匂いがしてきた。ぐう、と腹が鳴る。

「お腹がお空きになられたのですか？誠が今料理を作ってますよ、もう少しの間ゲームでもしませんか？」

山下は俺の腹の音にぱっと顔を上げると、俺の返事を一切聞かず、また俺を横抱きにし、部屋の奥に運んでいった。……俺、扱い荷物並。

山下の部屋はなんとなくボロアパートな一室に一人暮らしのいかにもいかにもな感じだった。中はロック歌手のポスターとか俺の写真とか俺の写真とか俺の写真とか……なんだこれは！

「あ……見つかっちゃいましたか。」

何だその「やっちゃった！てへ！」みたいな笑みは！犯罪！コレ一歩間違えたら犯罪！

取り敢えず俺は一つもカメラ目線じゃない写真を無言でべりべり剥していく。

山下に「やめて下さいご主人様ああ！」と泣かれたが俺の知った事ではない。むしろ俺全く悪くねぇだろ。

「ご飯出来ましたよー。おや、良い物持ってますね、尋貴。」

ニコニコ笑った木野が部屋に入ってきた。俺の写真は……まだまだ貼ってある。所狭しと貼ってある。壁が見えない。ストーカーだってここまではやんねーよ。

「僕にも下さいよ、その写真。」

「嫌だ！ご主人様ァ、返して下さい～！」

「っつーか、何か俺不機嫌な顔ばっかじゃねぇ？笑ってんのが数枚しかねぇ……それも何かビミョーだし。」

三分の二眉根寄ってんな。それでも、普通に笑ってんのが1、2枚だけあった。後はこう…人をバカにした笑みと言ったら良いだろうか。何つーか、我ながらひでぇ顔だ。

木野は俺が剥した写真の中から普通の顔の奴だけ選り分けている。持って帰るんじゃなかろうな。しかし……。

「……多い、多過ぎる！！山下、お前こんな数いつの間に撮ったんだ！！」

自分で言うのも何だが、こんなに俺の顔ばっかの部屋に住んでて気持ち悪くならないんだろうか。いや、ならない筈がない。（反語）

「毎日、コツコツコツコツコツコツと……！！最近では毎日写真屋に通ってます。」

「写真屋ァ！？ちょ、あれ見られんだろ、写真の内容見られんだろ！！？店員に俺なんだと思われてるか……！！」

「だって、写真屋の方が家で現像するより綺麗なんですもん。」

もんとか可愛くないから！！それに綺麗とかそういう問題でもないから！！！

「あ、ちょ、木野！いま懐に入れた写真こっちに渡せ！！」

「嫌ですぅ～。」

お前も可愛くねぇから！！！

結局一枚も取り返せなかったぜ……。まさかあんなに号泣されるとは。俺の写真はお前の何なんだ。

山下が木野に焼き増しの約束しているような気がするがウフフ、もう何でも良いや。……全くもって良くないです！

「テメェ！ネガだけでも渡せ！！もうこれ以上増やすんじゃねぇ！！」

「いーやーでーすー！！引っ張らないで下さい、ネガ破けちゃうー

！！」

「お前が放せ！！」

俺は山下の膝とか腹をドカドカ蹴る。ガンガン蹴る。山下は物凄く気持ち良さそうな笑みを浮かべる。恍惚的な笑みを浮かべる。気持ちが悪い。

俺は蹴るのを止めた。だって気持ちが悪い。

「あっ、ご主人様、もっと……。」

な　ん　だ　こ　い　つ　！

俺はかなり顔を引きつらせた。だって気持ちが悪い。

「と、取り敢えずその手を放せ……。」

俺は精一杯の笑顔をした。俺の笑顔プライスレス。スマイル０円。

「放しちゃ駄目ですよ、尋貴！！ダーリンにネガ取られちゃいますよ！！」

いらんことを言うな、木野！！ほら、見てみろ、気持ち悪い顔して笑ってた山下が「はっ！」ってなっちまっただろうが！！

「だ、駄目です、駄目でしたご主人様！」

あーほら！全く木野め、いらんことを！！

……仕方ない。最終奥義使うか。やりたくねぇんだけど……。

俺は山下の右側頭部あたりの毛をがしっと掴んで俺に出来る限りの怖い顔をして山下に顔を近付ける。

「……俺はそれが欲しいの。命令が聞けないのか？尋貴？」

「ひゃう！」

山下は訳の分からん声を発して鼻血を噴出しつつブッ倒れた。……勝ったぜ！！

「ぎゃはははは！馬鹿め！！こんなネガ俺だっていらねーよ！早く廃棄……。」

「なるほど……では、このネガは勿体ないので全て僕が貰っておきます。ありがとうございますね、ダーリン。」

にっこりと木野が笑った。

「え！？ちょ、ま、それは……！」

「要らないのでしょう？ならこれは僕の物です。」

木野は何処からともなく頑丈そうな鍵付きの箱を取り出してその中にネガをいれ、鍵をかけてしまった。

「あああああ！何するですかあああ！！返しなさい、今すぐに返しなさい！！！」

「嫌です☆」

木野は鍵を自分のブレザーの内ポケットに入れた。取り上げねば！取り上げねばあああああ！！！

俺は木野に掴み掛かった。

「覚悟！天誅うううう！！」

木野の懐に手を突っ込む。畜生、きっちり着込みやがって取りにくい！！っつーか内ポケットって右左どっちに付いてたっけ！！？

わたわたと中を探る。反動でか木野が尻餅をついた。

「や、やめてください、ダーリン！」

「じゃあ鍵渡しやがれ！」

木野は見た目道りの力で抵抗してくる。軟弱じゃのう。人の事言えねぇけど。

「……ん…む、ご主人、様……。……て！！何やってるんですか！！！」

「は？」

なにってナニ？

「そん、な…！ご主人様、俺が気絶してる間に誠を押し倒して……！！」

「え！？は！！？」

今の自分の状況をよーく見てみる。

「わ！！」

俺は木野からばっと離れようとした。

「駄目ですよ！ここまで来たんですから……もう……。」

木野は物凄い力で俺の体に抱き付いてきた。体が起き上がらない。テメェ、さっきの抵抗演技だったな！！？

「ね、ダーリン……。」

木野の腕に更に力がこもる。ぎゅうう、と首の後ろあたりを掴まれ、木野の顔辺りに寄せられる。

「わ、」

俺は抱き寄せられた事でバランスを崩し、木野に倒れ込んで床に手をついた。

「ご主人様！！」

山下が泣きそうな声を上げる。泣きたいのはこっちだ。さっきから

抵抗してるんだが全く効かない。

「ダーリン……。」

木野は俺をぎゅうぎゅう引き寄せながら目を閉じた。き、キスされちゃう……！？

「やめれ木野……！」

バン！

「あーやっぱ気になってあかんわー！なぁ、ジュントワネット？」

「いや、最早なにか分かんないでしょ！ジュン、トワ、ネット…なん、て……。」

「……。」

「……。」

「……何やってるんかいな、ハニー？」

ぎゃあああああああああああ！！何で来るんだよおおおおおおおおおお！！！！

「…あ……ダーリン……。」

木野が体を起こしてわざとらしく俺に密着する。やめれ！！

「じゅんじーの。ハニー押さえ付けてくれん？」

「じゅんじーのって何だよ。……押し倒す事なら出来るけど？」

「うんー……。まあ、今はそれで良いわ。じゃ、宜しくな。俺ちょっと準備してくから。」

「え、ちょ、待て！純也！！桃時！！誤解だ、誤解なんだーー！！！」

俺はその時の事を語ろうなんて、多分一生思わない。

白い日後の苦悩！＜後＞（後書き）

取り敢えず終わり！

ホワイトデーあんま関係ないｏｒｚｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6392d/

オレ等、動乱！！(作者の気紛れ集とも言う)

2010年10月26日05時00分発行